



兩  
夜  
集

~ 5  
5640  
1



5640  
1



序  
夫俳諧之為言也。四時之品物  
不同。而吟詠之。其樂亦無窮矣。  
居其無窮。而安以樂。則吟詠不  
乏矣。夫為言也。不害物。不傷人。  
觸其所聞。而吟之。寄其所觀。而

詠之。邀賓之厚情。燕會之贈答。  
言之者。無罪。聞之者。無尤。小菴  
庵確嶺者。予叔父也。自青衿遊  
于此。安以樂。既到。皓首年。陽  
春。請四方之諸雅士。於句。編小  
冊。今年到。四編。叔父年。正五十。

吟之。詠之。樂不乏矣。故欲自營  
於年賀。又請諸雅士之句。幸以  
斯編為賀。俾序於予。雖不文  
而不能為之。實閱之。則使諸雅  
士之句。其樂亦無窮矣。故出拙  
言序之矣。

七丑春正月

九牧 藤萬年

*[Faded vertical text in a boxed area, likely bleed-through from the reverse side]*

兩夜集四編

本旦知命之賀集

小篁庵主人選

去年之賀章

去年之賀も流石今春と松の花

奥及岩城

無文

ゆく春もあさ福もよめる徳長

刈 臧

経る年の何處より来る松の花

信及埴科新田

孔 左

長采るや千代も経ぬへき五十の松

江戸

伯 夫

八千代咲椿の花の極江戸の處

荷し

あゝあゝよふ十の春と花の時

三桂

千代魚へきた花の中あゝあゝ

吳翠

花咲く実あゝあゝあゝあゝ

兼雄

花咲き庵や孤生の春迎き

武石

何処までも延ふ日郷と春の色

不仙

本早よ春と集て草の庵

孤濁

あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ

秀和

梅々あや年々ふらん若き枝

竹翁

上三

是那の形とあゝあゝあゝ

あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ

碓嶺

あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ

茂什

あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ

谷雀

一里よ追てあゝあゝあゝ

百丈

猿梳のあゝあゝあゝあゝ

桐居

あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ

芥翠

上市の飛柳よ後す今酒

文雪

あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ

松醉

悠々に鳴るの笛も近く来

南生

情志を〜と書かす

五調

心り寂の更なるもさしは待候

什

月り物の中へ鳴るあり止

嶺

ち〜物〜と聲よ〜と声

丈

心跡〜と書かす

菫

五七のあぬらよあ〜る里の風

翠

海り其居と見え〜と行

居

咲花もか〜る程の〜と氣お

醉

上四

古き教をち不苗代

雪

今形〜る〜る〜る百ふる

調

右と左へ分る道の界

生

此村よあぬ家責のあ〜るり

嶺

鬱よあり〜と人の口端

什

時々鳴〜る〜る〜と舟寄る

菫

早く〜る〜る〜るの夜附

丈

従牙とも〜る〜る〜るの無島

居

積上〜と〜と〜と向の信

翠

一日々二日よ降る 懸るもはる

あはれは 涙の ちるる 泣く

待た方の ちるる 吹拂り 比

戸を 居る 嘴の 鳴

白川の 祭よ 人を 皆 び

止免は ちるる 祠 草 比

いつかの まの 影の あらと 附る

言は ちるる 一抱 買つ ちるる

茶よ ねく 花よ ちるる 足 履の 負

雪

醉

林霞

調

什

大

雀

翠

襟 飛 影を ちるる 盃

居

ちるる ちるる 人よ ちるる けさの 美

碓 嶺

あす ちるる 凡の 目よ 追 来

半 山

夏の 戸よ ちるる 梅の 咲 出

鷹 山

ね ちるる ちるる やく 羽 蹴 ちるる

易 足

ちるる ちるる 居る ちるる ちるる 月

半

ちるる ちるる ちるる 葉の ちるる 盛

嶺

ちるる ちるる ちるる ちるる 秋の 美

足

市日又海の橋の如く習

鷹

口上を延て清き紙包

嶺

おろくね慈とちつとて後

半

何やうをまてては焚局達

鷹

解ははく鶴のたへはまてぬ

足

一枚の経とへ清は月さして

半

紫花よ似て草の実をま

嶺

道の祀よ何とあるらん家財

足

築る程もゆゑに毎賃

鷹

草 花ちる里の残り明

嶺

中へ風新の引ぬ長閑さ

半

黄きう啼く残る墓の妻

鷹

雪よ落る松の葉をとと

足

何とまゝの嘶ひ慈路のりやうく

半

禿よまをうり明す反瘦

嶺

朔日や二月は猫のふ久あうて

足

聖降西風まゝの傳るさ

鷹

互内よ一歩の残を賣るを縁

嶺



意安からうを 落す 借合

四辻を西へ 這入の 多摩 摩の里

さうり 牛り きく 沢のよん

大勢の 月 見る 處の 空々

断る 入て 秋の 枝折

凡長 姿の 柿丸 落し 中 野 西へ

階子 上ると 車よ 小 丸 姿

草外を 儲よ 歩 行 契 通 比

凡て 吹 きる 陸 尺の 袖

半

鷹

足

半

嶺

足

鷹

嶺

半

上七

博くく と さ ぎく 仕 舞 ぬ 花 の 酒

襟とも 澄る 春の 糸一き

鷹

足

能く 光く 日の 永く 如 睦 月 如

噴く 入て 忘 止ぬ 青海 苔の色

嶺

積 翠

春の内 借すに ちよ 如き ちよ 持て

雲を 表よ 附よ ちよ 糸 糸

嶺

翠

さ ぎく と 月 の 濡く 一 時 雨

風の 枝一 ちよ 落 対 ころ

嶺

翠

荷縁と名集うる入院の

人よるゆく溪の益色

難く解をまゝ時とよく去る

愁の子癖を笛よ吹かす

引風乾と持病のやうに去る

月のゆるゆる山とよる居

大切よ志をも不用ふ野籠

紫山子と社と云ふて紫ふ

温泉と巻く石合せある三島笠

嶺

翠

嶺

翠

嶺

翠

嶺

翠

嶺

右も左も志くぬ日暮里

花の雪處くくに並芳めく

糸よあくる水よ運ぶ陽を

丁糸の跡く行ふ雪を

そのまの代と令て下さふ

そのまの徳利と信くる玉珠を

赤燈籠と清ふ電燈連

夕息と遠せる柳のむつゝ

帰夫の子あふる苔よせぬ

翠

嶺

翠

嶺

翠

嶺

翠

嶺

翠

名物のきり料理と喰ふり  
 八重子とくろく 依屋の赤貨  
 一粒も西の影あきとくろく  
 子作のふり編り色はく  
 十六夜ゆきゆきの秋と鑑をて  
 海さきふりふり ぬき先那系  
 氣袋赤糸を括るも世の安く  
 百う釘お 門のほく 長比  
 居風呂の水よとくろくハツ下  
 翠 嶺 翠 嶺 翠 嶺 翠 嶺 翠 嶺

上九

小鯛をのりの上る北濱 嶺  
 退くよ喉くふ花んき般さく 翠  
 三月遊 比々物あぬ春 嶺  
 糸とほくくくく 垣根や小正月 確 嶺  
 ころもよもやふ林のこあしき 東 葵  
 一吹の風うきくき 妻あらん 赤う女  
 念入く 孝ふらぬ喰物 嶺  
 竹房も戸口の月よとくろく 赤 穂

露わくしづる濡る梅子

女

併りも由断のあゝぬ秋の末

葵

山抱子篠の白ふ村柄

諫

人よ身とまゝの世を居り映うと

嶺

その形き巻よ細る巻紙

女

時を松の帯の落る影

諫

弓居の籠りと通す上の向

嶺

真向の詩のよそ月と体かき

女

草への命の疾う落る影

大標

上十

虫巻のえんもゆりぬ旅すゝ

葵

あつてはるゝあつてはるの物さる

諫

花道さ比企の斤里あゝうらつ

標

英あゝゆりゆりつる鳴声

女

正月とゆりつる梅の花

完明

管はる糸さるさるの端

碓嶺

候ふ几中よ隣の人かす

明

小舟のうづ漕ぬる

嶺

山の月をみればあはれもよき人

つらうとふとては舞紫の換の極

人並のる情のあはる寺の秋

五梅の曲の重石のり先なる

財をさうりま着目のうるさくて

信すよ貴所室のあはれ

あやしくとてさうりて流のあはれ

幣燭燈一々さうりてよあはれ

日休りも能くも月形流用とて

明

嶺

明

嶺

明

嶺

、

明

嶺

十一

勢の籠を採りておける

夏年貢みればあはれぬ納は

居る人の肩のむけあはれお

きひ日る暇もあはれぬお

釋法も三葉もあはれぬお

きひ日る暇もあはれぬお

きひ日る暇もあはれぬお

別道もあはれぬお

海苔賣の良もあはれぬお

明

嶺

明

嶺

明

嶺

乙

人

嶺

連す 処の志はぬ 水瓶

秋近く 赤日も 暮るる 風の音

恙も 見ゆる 修る 夢の 帷子

木魚の 温泉の 利と 勢とを 乞へ 修へ

管をぬ 先づ 仕舞 する 曲

四又軒の 強さ あり 一松の 沙汰

と 伝ふ 事 又 後 七 夕 の 由

萩を せり 送る の 者を 返す 人

春ぬ 物 未 だ 未 だ 未 だ 未 だ

人

人

人

人

人

人

人

人

人

上十二

中へ 仲間も あり ぬ 細え 人

寺も あり ぬ あり ぬ あり ぬ 人

あつ 大の 糸 織り 海す 鳥羽の 用

岩 あり の 白比 焼く あり ぬ 形 人

月 あり の 花の 秋の 後 あり ぬ 人

何と あり ぬ あり ぬ あり ぬ 人

靴 あり ぬ あり ぬ あり ぬ あり ぬ 人

一歩の あり ぬ あり ぬ あり ぬ 人

空 あり ぬ あり ぬ あり ぬ あり ぬ 人

人

人

人

人

人

人

人

人

人

日暮く酒と呉せる苗え  
 故所のまよも雲の起るく  
 刀もあも 柳も 糸 針  
 衝と舟の世徒をきくれ  
 掃り居や 迹不傘張  
 方角の遠し 月のさきうへ  
 霧て竹ふき 鴉谷の早  
 菩薩紫踊のもえら 花より  
 中 端帯よまを隠す糸の名  
 嶺 人 嶺 人 嶺 人 嶺 人 嶺

上十三

旅夜勇良に別し 日と志を  
 愁よう 一 品をそと せぬ 糸合  
 毛呂より 写す 消く ぬる 煙糸の空  
 董よ 風と 吹す ちん ころり  
 花よのそきり ちん 花の時  
 いのち 焼く 春の 春の  
 梅咲や ちん ちん 一  
 雪ん ちん ちん ちん 正月  
 以 確 嶺  
 吉 嶺

深賃の砂の手に長夏

夕暮もやし色ある魚の塩辛

昔の茶に吹返す一筋の月

鳴子の縄を水に沈めしる

此秋の夕邊を見込秋瀬詣

夕暮もやし物り窓の月よあし

双方とまゝお初を漁りぬ糸の端

糸のあつらうりおきも糸あふ

とまゝくく縁うもはくぬ糸と根

嶺

吉

嶺

吉

嶺

吉

嶺

吉

上十四

嶺

吉

嶺

吉

嶺

吉

筆

碓嶺

四十九年梅見今年梅の花

坂の中より那る秋風の入口

三日月の落るも暑き風の音

通りまゝあつた賣るる糸鞋

弓箆と作ら上るるお 碓き

りやまもあつたに日る水と糸

苑の浜辺を建てる糸の庭

夏をすまゝに 淵田のあつた



四十六 齒染ふ艶の春とまふ 標 旧

常盤歌ける人の名とまふ 嶺

萩も蔭も強しき秋 旧 嶺

聖の歌の心そそけつる月の新 嶺 旧

後とほきある所の考 旧

未さそそく

正月ふあひの雪あし里の梅 碓 嶺

降まてけしほくる餅花 梶 芝

あはれ降るるよ傘あし 嶺

上十五

飛御の出日と又もあし 芝

ち中秋ふはしの届く月の影 嶺 芝

枇杷の実噴に鳥あそぶ 芝

ふつとあし通るぬ向川 岸 嶺 芝

二交買する酒とあそぶ 芝

伏もあし便の者の名とあそぶ 嶺 芝

達摩忌迄の志らの刺る飯 芝

後梨付と祝うあそぶ 嶺 芝

あしる籠咲あそぶ 芝

竹処中へのちるもみ賦さ月の比

小夏の塵とちるもみ作比

柏子より鳴より早く衣きて

ちよてきうせむる状の又云

振舞の花よ様よ流行時

ちよてきうせむる唐崎の衣

知命の賀

此外の只の衣形も松の花

蘭之

芝嶺 芝嶺 芝嶺

雀の衣形もにちるもみ流し

無之

永き目よ旅の草葉冬くも来て

於面白うも祈るも 恒

君家欲も同一秋衣の待香に

傍比集てもちる草 於

隣りけよ隣とちるもみ編の衣

淵

是よりちるもみとちるもみ

伝流路の草鞋の重き夕万等

ふりて情の解し袖の衣

之之 之之 之之 之之 之之 之之

伝連繩の動けり香の啼えり

あゝあに涼し月の夕涼

霧消くつゆくつき相の苗

人々列るる秋の野嵐

身一ツの力かよちぬ漆の瘠

由緒書やももゆる腰張

去年今迄かろくぬ花とほろく

糸もろくろぬ青柳の妻

之 文 瘵 之 文 瘵 之 文

糸拵や道の形とまき野ん旅

登こあく維子の啼泣

あはち葉おとさきくひ春草を

お場もききりけり拵拵

今物と月とるる月り為星

あゝあに涼し月の夕涼

麻糸と賣る近盆の操まら

ふみぬの先と糸みけよき

嵩のちゆの髪と使よ志のり

碓 嶺

吳 翠

嶺

翠

嶺

翠

嶺

翠

嶺

素徳もあ〜ぬ〜の下書 翠

一旦又去〜魚の附〜ぬ送書清 嶺

蓬外や〜るは〜ぬ〜ぬ 翠

江戸酒と月よ〜ろ〜文のあ〜 嶺

あ〜先〜那〜居風呂の時宜 翠

わ〜も〜倍〜大工の得〜先 嶺

老〜あ〜寺ありす〜 翠

雪の山の曇り初〜花の散 嶺

菫の中と玄鳥のあ 翠

二月廿五日初會席上 嶺

折花の一本もあ〜て山さ〜 確 嶺

道ある限〜産む〜 伯 夫

曾進き来と花の伝居〜 大 鏡

月〜も〜 荷 乙

かき枝とあ〜る〜に外〜 幸 雄

明〜れ〜の降 吳 翠

初先〜高〜た〜居 武 石

獨〜〜 兼 雄

花建るのみよ庇と切解文

俵田

実付く終く給き芳光る

緑山

五三日踊おしける人もあは

勢山

月より上るやむけふ帳策

三桂

賛中流を穿つと鮎の活返り

不仙

らる呂多かり拂ふ薬代

如春

店留も務むは身の方の安さ

千之

あくと遠く患の隠病も形も

松井

笑さぬ梅のあつと掃ちきり

孤濁

上十九

七子星の月の掃りきり

孤星

あつと比のふり出れあふ凡中

秀和

取のけくは伊勢の法初後

亀犬

右一頃

何処うらもさる家法の柳如

碓嶺

風よ戻りて猫の妻乞

三桂

店か帯一年く人の多と待て

嶺

山うら山く運り挾送

桂

三日月の西の道より天京お

嶺

蕙々初と尸の世より那ふ

桂

はく新比て秋とくくくくくくく

嶺

眼のつと士那と暮秋より

桂

多因近中く飛柳の名と忘色

嶺

物より内より角と南

桂

業人とも号しても安き故き子

嶺

月の出ても雲扇をみる

桂

惟中より姫中より目のおく

上世

嶺

綾の一重よりあくむ悉す不

桂

細以利とて弘光と得て先

嶺

冬のおはさよ身のをちりよき

桂

吟者の鼻より花のあつりく

嶺

牛の森と居る此色のぬ月

桂

隙舞やありとも海す宮の孫

碓嶺

紫蘆の折すく土のこま

龜太

陽光のあけけんの美中

其詳

益も月ありさるにゆく  
 きさくす扇と並けと鳴らん  
 都へ送る 萩の枝折  
 ちとある娘よ送るこを振  
 清をよ形ふ百坪の登  
 入舟と箕よ出ころ朝の内  
 昔ふふふよあや免ふ買  
 身一つの形あきとね枕して  
 時流りすふ傘の白

具 嶺 詳 嶺 詳 嶺 詳 嶺 詳 嶺

上世一

ゆく秋をよ月よ年あ振夷の聲  
 孰の程ともくつきてきる  
 何処へ中あさふかり秋の末  
 佛の啼りあや啼りよ形ふ  
 植續と梅の花よりんるらん  
 うるる啼 弱きも形く  
 一二掃咲追梅のきあそ  
 心うら子の日の色し月影

嶺 詳 嶺 詳 嶺 詳 嶺 詳 嶺 詳 嶺

伯夫 確嶺

黄きの卜餌の粮と菜と掃く 荷乙

二ツやも形交もはらりの瓶 夫

掃らるる雪もも候春迎く 嶺

きの人も今日も忍辱の来 乙

セ候もあく寺の虫食子の空りて 夫

きく竹叶をぬ 炊の落毛 嶺

十夜盤てくろくぬ 函の三ツ三ツ 乙

あつたは徳とやくす文 瘦 夫

猿先の野もあらし 友 降 嶺

上世二

あはまはせぬよ 結納ら来 乙

松よりも後の他は月さして 夫

福く比十申し 女粟の外時 嶺

桑のぬき桶のさるはく 秋の風 乙

彼客来りの通る 大垣 夫

七ツ月の早き日御も花の新 嶺

種なの何首こ鳥つの玉と撰出らん 乙

あそく脱袖さく 形か広く又まあまより 夫

年季うあく 中な種くちをする 嶺



セ旅まけよ燈ん買へと人と呼

乙

系玄孫の宿の坂の夕以沙汰

夫

欠しとんさけくささる後を従士

嶺

挑灯提て帳付り来

乙

すまゝに袴の裾とまゝ切て

夫

采一懐よあさる野海

嶺

戸も拵とぬ小家と難きと月のま

乙

森も蔭も面白きつ

夫

袴裾返り用事の出来ぬ

嶺

上世三

作らあさる地帯舞妓の群

乙

見と久きよ親子ら居る後は

夫

年の暮るもあさる日當り

嶺

あさる並に不祥又眼を覚

乙

雨の鳴るを豹舌の啼

夫

二三本上野の持の花咲て

嶺

水もあさる春のさくら

乙

そま目とのけももた睦月弘

碓嶺

雪圃の春と筭不

李城

常考の羽根と這ふふむられて

素山

十六夜又群ぐる酒の形つうく

久土岐

十六夜又群ぐる酒の形つうく

奥毛

矢立の雲の乾く秋先

肴山

音ゆせぬ霧よふとろく小馬人

城

袖をく巻又脊中向う

素

走くくは海とぬら入行拭

岐

上世田

靴の毘のユミを可形ま

毛

佐倉近行もりくも晴はく

肴

何処も八幡の糸を形ふ

城

月の影引を秋又さく入

素

冬はくく小角を婦夫く撰

岐

盆の内牛と折角うくう

毛

古のくくくの跡る麦笠

肴

花の吹簾くもはのね簾とく

城

蛇り飛ても脛擦てくふ

素

髪利らん明日の浮世の更衣

筑波の山よ雪一ツ那き

芳に衣々に灯とり寸衣も夕景色

鉤籠の縄のききく沙汰あふ

振舞よまじり器と借集え

山伏をまじり邪門よまじりあふ

髪と衣に夕障も飯の情も

みくゑ衣紋よさえぬ裾も

野を横よる走るとふ小待

上世五

岐 毛 着 城 素 岐 毛 素 城

名の形以草も植よ出る以

草益心連のふえうふ霄の月

頭痛うくふ秋とあふ

ううくと女三の宮よ仕比り

物のつげ糸よみくむ鷄

双六の七目もあねあらしさ

ろく呂おくせ以雑の解ら

花さうう早産あう

ろく浦も黄鳥の中

岐 毛 着 城 素 岐 毛 素 城

発句春之部

妻の月野あゝ山あゝ水の上  
咲かゝもやゝぬ花の曇り  
似るも如、那くそ風吹柳之影  
花のあゝと多〜と吹や妻の風  
花よ来も花よ洞のあゝうら  
襟舞やまゝみ〜と須广の家

信善光寺

長 櫻 訥 皞 蕙 無  
莊 居 存 翁 國 能

白梅のまよひをくらむき如善光寺

如蘭

とさるも並へて夢を以て睡月如

欽堂

夷の山まよひをくらむき如

百里

小松も白の影をせ月如

吳山

山里や一本の梅は夷長き

雪頂

水はあふ新のうくく梅の花

禿翁

雪や帯人の初春の耳又つと

一枝

替りても夷のうくる山如

宗圭

人の子のほろもて来り董如

換鷲

約束もまよひ傳来より花の容

塩科新田 吉高

日一を以て梅のうあうを孤生山

良歌

夷の雨降あやうを来り明る

塩尻 椿老

抱ふ子にまよと届りける梅如

又ハ 渠伯

夢さうは門の日あや梅の花

坂本 兩紅女

花七日を以て七日を花の菱

杏沢 文虹

黄きにまよ入とさちや年始先

白田 櫻叟

心さうもよ廻り送る人花のま

思月

花のまよを那祝あう新森又走る

柏泉

思ふさよふもささく柳の二月に

信及白田

白峰

山はくは越ゆる花の林よの

春翁

近江舟や来一葉よ鳴雪蕉

橋月

雨の雪花の曇ると初より

文眠

常や気候又通る菽中一き

積翠

新法近用一春るさほ蝶の飛

一窓

茶の戸やまこ庭をさ梅の風

和角

丸先のさゆるささのりの雲よの

逢春

約束もさ折折より梅の花

琴

鳴雪の雲の先より梅ちる

林霞

木の影のこゆる梅の白比より

木槌

雪の草も同ー白比や春翁さ

椿水

花よ参る日の出よりささ

五調

ささる心をとらはせ花のさ

錦水女史

光陰のさやき祭や初梅

瑤林女史

春一花を掃けい又散有最

潜山

雨又春て二日の花の夕の那

東洲

雪や来ささるさ飯沼の海

如鳩

上田

新田

上毛西ノ谷

尾島

二

赤城らしきや余雪の先廻り 上毛大原 茅丸

凡も高く一歩 晴るる 柳の影 アサ原 壺半

衆のうらみ 下座を 晴るる 其の空 狛川 餘力

雄子鳴や 瑞山の 月のみ 今ある 尾島 正路

足代とありて 衆を 吞 鹿の 藤岡 浦人

梅咲や 近及の あか山の 萩 赤城黒更 雄通

月の入 あかきき 衆はくを 知 木甘キ 鈍繁

芥蒿 洗比 分るる 野川の 植木 樗舊

あ々の 衆より ありぬ 本芽の 時 三 樗文

鹿野の 果形を 果形 仁井田の 上毛 田舎

咲力 弱の もと 梅の 影 上毛 樗乙

梅白く 垣の外 あり 衆の 影 沼田 雪道

川の 島や 如月 雪を ぎ 彼 影 沼田 東葵

落 梅雪の 影の あり あり 沼田 東亭

松の花 飛や 湖より きて 影 左南東 松雪

海棠や 別より 晴るる 影の 由 左南東 一蕉

盆中や 梅より 歩行 衆の 影 左南東 笠人

柳の も ありて 日永を 影の 左南東 完明

く昌此花よちと終そ花も友 上志日向 路 碩

曇日も花の影と曇因川 坂本 音 山

歌の梅よ首とを移るやるの上 下仁田 三 更

野の市も早と云ふし梅の花 路 夫

爽きくもさうさゆる根椿垣 武蔵横戸 阿 兮

隣村も爽赤きく一蒿の歌 文 玉

正月を短く思ふ日和の歌 玉 芝

曇の色もさうさゆる月歌知 松山 芳 石

族一夜二夜いさほの蛙知 松山 之 好

陽の声あきて別る戸あし 志ヶ村 逸 雲

芳は中を短く思ふと出る山や二日登 唐子 八 橋

爽の風海苔の白比の芳はあう 唐子 里 恵 女

古々の柳うすし長き響うれ 唐子 如 毛

静さのさゆる限や福壽草 秩父 有 臺

夕暮のあきて歌又入梨の花 秩父 心 翁

黄きや廣沢の池浪をさ 深谷 貞 秀

笠免了旭拜や雛子の声 高島 溪 翁

夕とら云いさぬ梅の月歌知 鴻巣 竹 堂



舞衣をうし見流る山もあつて鳧 武及鴻巢 年守

内庭の土草掃りて青 彦 雞 夫

襟形や花 高き庭と控もせ 武 山

鬱月 流る水を入 海 那 子 松 調

本若梳と並へて宿の奈多 松 川

乙の子に葉とくせり 松の内 龜 年

残る雪 菊の梢と軒より 士 玉

七葉や何処よりき 霄のそ 古 玄

光日もあつてさ 以 来 や 油 賣 南部 卓 堂

眠るまゝ目先よ 来 や 梅 の 風 江及八幡 菊 雄

洩らぬ夜 露を止りて 葵の雨 下毛渡々 一 夢

さつらんよ 呼ぶをき 桂 花 足利 芭 竹

むせ日あち 二日あち 小梅の花 花 笑

わらわけの 着たる 梅の 秋 霞 嘯

蓬萊の雀も 鳴けり 旭 桃 仙 上毛桐生小友

稚子のととを やさる 法 真 橋 三河

泳ぐ 行 尚る 本も さつて 那 卓 池 勢及

志をくく 回す 水のある 柳 昌 作

時々々ぬ候振舞や薙さく 最上元山 二丘

梅より魚より日と花の影 秋和

雪解やきのの長と繩手乃 貫津 吳秋

長き世をかめり手梅の松の花 尾花沢 東二

一歌つて松よりや反逆さ 尾花沢 感涼

花より梅より人のる候さき 尾花沢 涼居

花の雨行羽ぬささ鳴小鳥 谷地 仙李

朝の花既中よ傳て去るさき 羽呂酒田 一湖

心はささぬ去るさき 羽呂酒田 河道

川日の水ゆく行垣根 本庄 桃吏

鳥も梅く木の上ささるる 本庄 巴江

梅の花世よりさき 米沢 宇喬

青柳又ささるる 米沢 尺蒿

梅歌やおあし 善光寺 素律

中よりく 善光寺 大盈

よき節よさる 善光寺 正令

襟より 女 雄島

花散や世より 善光寺 飛峯

世より君とくく森とある花をのき  
戸口まき細ある森の柳の形  
系より形の本字も花を花董  
松 大松 乙員 柳々

夏之部

青嵐世よりほくろあは人の上  
鴨の巢や老より小くき椎の由  
浮草の蓋も流るぬ暑より那  
川竹や思ふぬ月と見え底る  
梔 白 歌 緑 叢  
芝 理 川 雨

善光寺

空て居る側よりまき初くゆふ  
山まきく本字の白より暑より那  
山水の老くまき青き田面より  
那安き歌にあきまき杜若  
菱のや星の舎りてまき又籠る  
山里よりまきぬぬの五月より形  
更なる歌のほくろ比もあき涼より  
夕鳥や水も自由な住居より

善光寺

佐渡の國小木曾安隆寺より

梅 龍 進 古 一 楚 古 五  
雅 池 春 言 芳 水 菱 什

信及サカキ

風の吹方とくく一長中 田植唄 信及岩尾 文席

時きまの秋の月と秋とくく 上田 松酔

一編の花も牡丹の白は可也 帰年

何くも一日啼き森の蟬 上毛三ッ木 月亭

月と夕一深とあうの屋敷 江戸 志覚

撰集の沙汰も多し入る 京 謝堂

明安き歌もも 下総 夙也

叢虫のこのま 江戸 雨塘

又と多めと歌くに 八 茶静

流後川扇 上毛藤岡 鹿太

草の戸に ハル十 青嶽

吟 下仁田 霞梁

入甲の 下毛足利 金馬

杜若 武及新戒 雪雄

か 行師 高居

六条 奥及カ川 女代女

附 仙臺 女比女

昔 女 亀丸

白雪の降りると鳴る果古き

仙臺

清女

須弥やけこ近き縁の細の魚

天洲

手あそびのまゆの葉細や鳴くかふ

ノク岩城

馬年

冬時のおくの葉古き月の境は

羽及森上

甫山

月の入ふ山もある葉に牡丹咲

如仙

夏の虫のよ声とさうさき

米沢

松房

山挽子や鳴るの葉に料理の石

太橋

よふ夜に葉にけりけり那葱子

咫雲

細くも月夜ある葉鳴くわ奈

九

曉花

雨晴のあやあきさきや時を

羽及谷池

平車

あや葉を軒端に近き二の山

境水

流しに葉を流す酒のさきり時

正十コ

楓二

後の月夜に葉のあきさきり

武及川越

秋水

限るく流る葉を流るは

湖山

秋之部

忘るひのあやさきと葉の秋

上毛新川岸

雞周

等軍や葉の虫鳴はくさる

新早

川二

草先や照る葉を流るは

太田

掌石

三日月や秋の彼岸草の姿 上毛上田島 過橋

秋草ぬほくはく 櫻きくく 尾島 豊翠

さつても降物い定新木槿咲 太田 苔年

壺の灯の像うく 涼し秋のあ 江戸 鶯笠

あしやうと咲てさくや 芦の花 上毛下仁田 禾葉

秋の日はあけぬ 居新月 上毛下仁田 蒼雨

秋の日はあけぬ 居新月 沼田 池明

月の西山の上がり 晴又 沼田 八十楯

編りゆき夕ほく 旧居更 乙童

山越え隣 サキノ宮 東好

秋のそら益も 正月経 坂下 祇来

咲花のおく 飛と白 坂本 松阿

赤い顔 秋のそら 坂本 伯芳

釋外の多 坂本 李城

聖い 坂本 く上岐

ちや引板 坂本 奥毛

淋し 下毛足利 百擗

川風よりりやうりある煙籠は 下毛足利 嵐高

 常州平方 五竹

何となく春も色ぬ秋は銀河 江戸 大梅

井戸くさの掬子久し秋嵐 大坂 木木

昨歳と久よりて葉の畠は 仙臺 一肖

旅すものく不断は知ぬ秋の月 江及七里 日人

風も世よこさくぬ二百十日は 勢乃山田 巳兆

塩竈は煙は秋へ行 羽沢柴沢 文外

ちや秋よき旅へ浦の煙は 十一 古翠

待宵の庭根や おと 不杖

猿人又細く物 く 徐山

弦しき程日の尚る お 南喬

房よよ生色 あ 佐平

柳花うし 長 月

秋よりのあや や 里丸

葉隠よ柿 あ 錦哉

友あ く 闌兆

春の日の あ 春躬

ふひてゑ。二日續てふらう。蘭溪

奥只社度

草枕しそき。色をまの秋。雉啄

相及

行とそそ那をせの外や山の月。魯恭

信及小渚

歩同衾の雨やもあつた秋菜。秋菜

戸倉

さゝぬくに更り秋と鹿の聲。八朗

廿九本

秋の輝きとあやうそ鳴もどよ。如水

初秋やあのかたきそそ。鳥雅

遠山の迎うあつたけの秋。象長

灯と消る声よ雪あり虫の中。禎雅

十二

山葎やとあそとやうは風の吹。珠未

信及下縣

そそあへ一霧よ折はぬ力か。一桃

あそ良の動も笑も表。弦武

秋をく丹よ身と。五山

八前

年くよきのめ思も。志孝

若尾

映枝や月よ見も。鶯父

白田

葉の長ややうらう。三巴

杏沢

風よ追は風よ追は。素流

然秋を招くやう。浦水

新天宮



稚の本もゆるらびや世にわ

信及岩沢

素好

素山子さへ森傍より月取

谷

美奈

鳩吟や牙うしむ声も秋の音

白田

梅枝

遠空も目出な秋の一はる形

八満

皂系

水は只初めは那は秋の音

八満

羽邦

年坊は秋深くする落る形

小渚

葛古

更よりりぬすすも菴の秋

小渚

首丸

たや子の上は落はく月取

詩文十綴

三民

月も秋深くや山のたもは

十三

魯山

猶妻やよくも盈まぬ子の身

信及岩沢寺

豊湖

よく空の飛しぬのきさくは

上田

豊雨

色くえぬ松や子屋の根よも

易足

月今宵もよそはさうは

鷹山

秋宵のまもんは須廣の月

嵐籬

山寺や雪の戸閉てもうら照

暁水

舟鳴くは男花よのうら月取

桃水

未枯る月うらうらふ外山

谷水更

百丈

ちや秋の葎ようけ草ね系

谷萑

外萱の中よき人煙より那

信及上田

南生

種よりぬあゆりうらまは葉は

帰年

七夕や露けき夜の畑もゆ

李尺

と形人の毎るふ息と今日の月

千丈

葉笑て次舟のあゆむ白ひり那

壽幸

ふと返てと露のあけけし紫をさ

古柳

静さのぶらぶらと来とあ枝の音

高橋

燒茶や一同居とてぬ容の来

桐居

房しうらうら露よあまふ月日は

文雪

十四

星一つとるまきとあし情冷は

左梁

降ぬよ木の葉のまじりて舎の那

茂竹

鴉おとさしきとまきし小松石

武日

あまきとるのしとれ冬あ那

檀田

可厚

勤く程をさすき桔梗は

梅温尼

仮房めよ入山法師とまきとる

善光寺

松翁

ちや秋と人のまじりての渚の形

イセ在田所

春艸

竹とるまきと秋の響あり折戸

北河

待雪のあまし月形月とんあま

緑庵

んを眼へりつふまや山の月

善光寺

吳融

う飛—この思ふにあ—山の月

兔洲

形よ舟の象とすまき—うこの秋

帛堂

糸の味と志る日のあ—を秋の雨

槿舟

芳くするの秋と—遠—山の月

梅窓

佛よ侍へ兼—くそ 永木 魚

草奇

本出らぬ 嗚を 新あり 綿の花

其詳

冬之部

松の樹よ 涼くぬ 色と 枯地弘

上毛尾島

持白

軍志を 佛—くありぬ 里 神 乐

上毛田

官翠

今啼の 何処の 七ツ せ 初 時 雨

谷川

山よ山の かへる 里や 小雪 降

浅原

梅雪

風の 濡る 吹く 雲 田 川

赤岩

鼠月

十月や 砂の 流る ちの 塵

大原

淇竹

花を せと 糸と かく せ 冬 の 梅

赤堀

朝光

初も 舟を 舳へ 中 海 人の 業と 梅

道丸

風の 吹きも 涼くぬ 煙り 茶

江戸

茶徑

はくろ 形く 舟の 影—く 八ツ子 咲

久藏

荒てあはれあきまはく如術弘 上毛沼田

乙人

行きてやうね向を指しぬり花

永諱

山崎あはれもあきまはく小春弘

あや女

初さのふにゆきよ月のきり那

きり女

庁空や時を待しそまの啼

兎笑

雲にすゝ人のかまひ人もまゝ

可布

蓬生に掃りよせしる落葉弘 江戸

護物

掃あはれ棋のこゆき時る弘

春路

咲しこのあきま届て非道 武蔵鳩巣

和言

背戸の舞茶の本の花もまゆり 下毛足利

まよ岐

辰あきまあきま後あきまの入

蘿六

も届のふよ日の入きり那 荒年

素考

便や中流ありきり時る降 武蔵中瀬

紫雪

月影をあきまに指り柳弘

石雞

狼も軒は来り居よきりの雪 千住

金丁

降きりかきり形し歌め雪

歡水

冬の月松の本あけの吹りりぬ 江戸

燕市

猿先をきり旭めきりりり

米五

きのりふも降らぬ目も交り初時る 羽及三井宿 文河

をけし水もあると澄り鳧 一本柳 和有

面白や秋もあつたも 米沢 縮磨

あのみはんとあはぬ 酒田 志蘭

岸のまやうもあつた 米沢 左母里

冬の月秋の雪もあつたり 米沢 佳風

水仙やあつた 信及十郎寺 山水

あの実のあつた 三分 冬扇

枯草や山道 十七 槓鳥

まきの羽も枯 信及新田 孔左

あつたよあ 六川 白兔

あつたあ 上田 月叡

外萱の枯 上田 芹翠

宿あ 江戸 花滝

秋あ 江戸 啓山

降は 羽及カノ田 以吉

青桐の 善光寺 蕉布

雪あ 善光寺 白堂

吉里やまへて道ゆく茶の花

碓嶺

月をうつくはるもの上

阿分

一秋の綿よろろある綿貫て

岩嶺

隣の用とを志すにきく

赤分

す掃のゆりより縁一巾組早

井嶺

登のゆりけもゆりぬ雪空

月分

来る頼る人よかくる病上り

白嶺

将多と浪のゆりより

瓦分

十八

引合らぬ情を止えて小毒は

嶺

縁と解て生日とゆり人

分

積あがり海とこあらぬ昨日

嶺

かえりて海を存するあり

分

待身と見え込よる津釣瓶縄

嶺

臥痛よりす息にさく粟を喰

入分

舟登りもよかくて舞の風の文

冬嶺

初雷のあき那よりりり

分

花の咲山路のあそ田又曳て

嶺

物と車とありる糸遊

兮

後の月桐の本さく澄よりり

冬扇

子近くともり外残す猶

久上岐

長板のけいとも秋又行とせし

碓嶺

セツリ鳴やこりよと尋ふ

扇

さ白の菖蒲の花の咲掃比

岐

人十のせきあり糸の怪合

嶺

何中くと信ふ能す女子供

扇

十九

酒屋のかよふ自由いせぬ

岐

糸揃くかされぬ悪と音らまそ

嶺

十 忍は志のよあゆぬ摺子

扇

しらねくのみ味方も歌と引別れ

岐

初 夢てそりりて海まぬ軌立

嶺

巻とて糸あひきるそ方の月

扇

時 秋又風をのむる幸毛川

岐

瘦らけと牛も糸に喰あそり

嶺

天 斤足くのみ本履骨落る

扇

花の以賦見仲間集りて

岐

喜の氣あそくける草妻

嶺

初午も来ぬと傳るの廻り口

扇

こゝろ安けられと物買入

岐

妹の落忌先も多賀の在

嶺

夏ノノり及暑積する

扇

下への下の勤る役と鼻よけ

岐

人といふて配る温泉と虎

嶺

風も赤く雪うさしく陣出

扇

通りと當又はくる礎

岐

うはうりと鐘町方と詠きり

扇

河よ遅れて逐る嘴太

岐

横巻も十日あやりの月の影

扇

志すもはふさし紫雲と鏡

岐

五分通りを集める数年貢

、

陣の並ふ奉加す光ふ

扇

下忌近流初をゆる氣色

岐

風雅な友とあやす系死

扇



霞中つ花の咲中つ日の長く

西も東も玉川の妻

岐 扇

輪中月々の浦和の晩縮み

周 雞

来々りたるやうに列る色香

梁 良

月の以組振舞の座と持て

嶺 確

猪賣市へ親子出くくる

周 周

山里の伎も届く暮の末

梁 梁

茅根草々の庭の菜苗

嶺 嶺

世一

象丈又秋の来よりり本程咲

莊 長

遠くもあつぬ月の如処

嶺 確

洞子の餌とする黍と外へて

莊 莊

湯浴の受より花よ来たる

嶺 嶺

香中つ風の吹中つ小春先

莊 莊

腐新坊よも本懐を

嶺 嶺

あつやとを是てぬる官道

莊 莊

月日一交の通る柳倉

嶺 嶺

斤時もふと流をぬきとあらう

莊

寝と云はまて居処の形を

嶺

五月目のあらあく晴る雨の沙汰

莊

人とあつたまは籠かきする

嶺

いづもまを遠くさしや小室月

莊

百とやわらわて賣きぬ同引菜

嶺

又平に書てもろのまきもくは

莊

佛あつたまを扶持えよふ

嶺

若やすき花よむのまて歌まて

莊

眼のまやまてす黄きゆの奉

嶺

春ぬうちよきめつあつらんふの月

確嶺

虫の飛はくさむし長め端

白堂

鮫さしゆの油の安い秋きり

嶺

庵子舟のまをとのみま

堂

蒲も其まをさすふきの糞

嶺

まをさあつてまを風吹

堂

又てもまを薪の能も足はひ侍

嶺

著の自比の陽と協る此

堂

らぬるに云へあしと能意あるは

嶺

情志と云も磔あまふ

堂

梅子と菜よかんと破れとて

嶺

こゝろの解けぬ月の村を

堂

塊概り茶搗きよかくありて

嶺

麻布の秋堂人の心やうじ

堂

休別と草鞋中へんとまかす

嶺

唯然り負も休きすも

堂

三

花の流何処堂もあまはし

嶺

根芥搗日の物よまき

堂

舟とと替りうもろくは物舟

居

夏のまきとろくは後人の紫

嶺

地車と荷とと由志とぬ酒後

居

猿の影り出るや居眠る

嶺

逢ふ又又月の不良のあま

居

今年ハ秋のま宛念のうさ

嶺

五三傳衆の禱の也 横あさく孫  
年入も中々えぬ 大日の鐘  
待よりも中々遠き 通路又  
禿よ 曇きく 跡のあやえる  
何と那く 笛の色香の 研後 耳  
人々 眼とほく 袂の棟上  
十露 盤よ 葉くぬ 浮世も 月又と  
冬去と 噴雪 吹て かつらく  
白露と かの 歩行 本芳の 谷  
居 嶺 居 嶺 居 嶺 居 嶺 居

古

其日ノ一と 心ゆく 四郎  
嘆出るんめ 花のしる 日形き  
りら 草よ 氷岨の あんあ  
更級のほろき 月さ 山路弘  
秋のあひ 秋と ちろく 穂芒  
槁の 実と りは けと 稔 忌  
おと ちり ちる 舟の 供 ちち  
くや ちり ちる 舟の 供 ちち  
翁 嶺 翁 嶺 松 嶺 居 嶺

新雨後とくふ手付比

嶺

不破の夏雲とく夏の紙とけり

嶺

市街よりけり思ふ岩と

嶺

又三日後けり人々をよき

嶺

階子もゆきし葉の葉と指

嶺

居るよも晴の絶ぬ人の来り

嶺

先工夫すふ極の物より

嶺

跡る故の道よりも近ぬ月の影

嶺

落る盆しと後庭より

嶺

露よもも軽以今と鳥帽子忌

嶺

秋子のやりに思ふ黄く

嶺

雪の枝より雪は花と来ぬらん

嶺

九りの流影と葉は折れ

嶺

山風の吹くも空しく指梗は

嶺

秋の荒色の雪は空にぬ

嶺

塩魚のあましぬ味と月待

嶺

海心は磯の紐くむすをふ

嶺

遠くよき... 嶺

未と畧

四時混雑

栂... 半山

本や... 手堂

第... 南竹

絶... 梅向

廿六

雪の... 素毛

栂... 馬佛

長... 一峯

換... 標舟

置... 柴路

中... 素山

陸... 文魚

酒... 楓二

忍... 淇竹

年々月々の縁と身の中々  
上毛並良田 兔月

さうらちよとやあそびよりうまのき  
大坂 井眉

日の色にうまぬあふ門さうら  
羽衣之山 復溪

忘るも路一戸さうぬ屋の秋  
米沢 李堆

葉の目とあそび酒香小菖蒲  
上寺 龜駒

藪の梅さうら白くあそびの那死  
武及太谷 呼牛

朝日の月とあそびさう梅の花  
大坂 和口

ぬきと花さうらおやあそびはさうら  
南部 茶外

面白きはけの降やむ小雪う那  
廿七 谷雄

雨の夜の秋のあそびうら  
江戸 幸雄

日さうらや夕日と返す切通し  
如春

月の出く照さうらさうら春の雨  
露苔

葉猫のさうらう 噫けり 苔 弘  
箕桂

あそびのに菫の湾さうらあそびの月  
岐久寺

あそびのやま 麦 穂さうらさうら 葵 草  
阿恵

志くさや二光さうらあそびの雨  
馬末

あそびの形にあそびさうら思ひ秋の音  
月古

あや御遊来や雪解の水の沫  
碩翁

梅の影をさすぬく〜人ゆの折江戸

蕉雨

秋のちや〜折るきぬ世梅弘

素芯

水騒く音曇り〜山さ〜

荷乙

門〜や引取方の若〜

一具

ゆ〜や梅と〜中吹の一重垣

梅壽

音もろ〜鳥も形〜庵の美ん

むろ

昔柳のま〜う〜ま字はめい

計筵

七子の七役持〜蓄弘

應々

雪解のまよ〜ま〜ん色木履

大鏡

あ〜けあ〜ま〜ま〜あ〜り梅の花

鳩明

人〜と通りあ〜〜〜春の月

林曹

尋〜のま〜ぬ山遠〜や〜雉子の夢

吳翠

苗代又雪〜〜或や田子の浦

曲江

う〜う〜あ〜出〜送〜〜〜波子

緑山

常や待〜〜初〜と今朝の幸

兼雄

野の廣〜眼〜〜や〜〜〜山筆

俵田

あ〜あ〜あ〜〜梅の白鹿弘

交洲

明〜あ〜〜〜あ〜あ〜花の月

長鷗



散こぼる酒さけと交まじりて送おくる江戸

松井

楊やなぎの如ごとく人ひと定さだむる那なの雲雲

千之

夕ゆふ影かげの難がたの上うへや松まつの花はな

ちうき

梅うめ咲さく種ねのまきまふ葉はの如ごとく

里童

咲さく種ねをまきまふ退ひの梅うめの花はな

孤星

一ひと房ぼうとまりのまふふ葉はの如ごとく

荷了

梅うめささくや一ひと掃ほうははく日ひの送おくる

菱賀

亦また一ひとつつろろとまねねむむとまの雪ゆき

不仙

若わか草くさや王おう昭しょう君きみの夏なつのああゆゆ

孤星

ああゆゆままるる月つきのううららんんしし梅うめの花はな

三桂

草くさの戸とや梅うめのさききににのの届とどく

亀次

かかししけけああくく咲さくくととせせりり梅うめの花はな

勢山

冬ふゆの月つきと送おくるる人ひとああるる去さの山やま

武石

非ひ路ろ山さんととああけけててききををととるる

以吉

中なかふふ入いややつつりりととををれれひひの山やまの月つき

石膽

ああららるる花はなやや路ろのの咲さくくもも春はるのの届とどく

桂造

乞こ目めやや瓢ひょうののああややふふ葉はの如ごとく

秀和

花はな散こぼる法はふ師しののりりるる辰たつみ蔓つづみ

伯夫

月海更

進加

碎て橋よ登てお後の春と志くは

移り鳥や音く〜毎の梅の花

長 鷗

今橋〜き春の来より

幸 雄

逆とふや又霞と〜ちを〜

鷗

蕎麦揺舞〜通〜下

雄

志あ〜ん 银杏の色も月えと

鷗

砧の音〜更る秋の形支

雄

虫の虫と行〜〜鳴る〜ん

鷗

云々のさ〜に包む情形

雄

眉〜この役も落〜急〜

鷗

破山越〜暗る白雨

雄

あや〜生〜耳も時〜障の孝

鷗

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

雄

笑〜二合半酒も月の以

鷗

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

雄

青〜今ある秋の〜の〜

鷗

〜〜〜堤の普借〜〜

雄

様々の舞のりとも思入花の中

豊よ豊なるまは〜その末

菊の鳥と似合ぬ只終りけ

于奥又門とぬさく斤甲

何中〜と虫病む者よ心あ〜うせ

子鶴とや多〜うや〜と七年

銅丸のぬく〜と袖又持ち〜

雨降よも折〜る梅子

逢るぬ花と豊の雲よ〜魚の

えぬ〜り先よ〜そ〜中〜き

有あ〜る嚏薬と皆那久〜

や〜と〜や〜の落る本屋早

虫皮に通〜あ〜りも月の中

釈指よさ〜あ〜さ〜栗の鉢

か〜掉のきに別〜ふ鹿の妻

琵琶お法師琵琶上居成る

口不ゆ〜〜施行の糸と積重孫

長〜と〜逆き〜羽の秋伯

鷗 雄 鷗 雄 鷗 雄 鷗 雄 鷗 雄 鷗

雄 鷗 雄 鷗 雄 鷗 雄 鷗 雄 鷗

花の本に接する松も一糸色

揚ふき雀は雛子の啼く声

雄

鷗

散花の花よりこぼれ梅の形

信及戸隠

竹窓

瓦焼きつらも音も花の音

傾西

雪を雀鳴やまきの山の西の草よこふ

江戸

湖船

初梅茶碗のあけぬ寺は森て

鳥語

年賀

采さもさうりのありを松の花

素月

あまを多しゆふ似たりたるの水

信及善光寺

竹翁

大仏の座敷よきなる時の水

伯希

一寺のりや一寺のそとを川

相馬前田

古橋

松をうきあけぬ梅をうきハき

上毛人見

素泉

流はりり曲くくて更のあ

一路

きの影力もも鳴りせの雛子

秀保

漣の風をうきざり松の花

鳥曉

うる物の影を思ふ花の中

水沼

芳一

あもくせ道に人の二月うき

江戸本所

宝山

其 一 鳥 鳴 泉 聲 林 樾 相 掩 日 光 不 透 風 聲 不 聞 但 見 泉 石 相 擊 珠 玉 爭 輝 此 乃 天 地 之 靈 氣 也 故 曰 靈 泉 也

其 二 泉 之 出 也 必 有 其 源 夫 泉 之 出 於 石 者 必 有 石 之 罅 罅 之 大 小 不 同 故 泉 之 出 也 有 如 珠 玉 之 出 於 石 者 有 如 膏 油 之 出 於 石 者 有 如 膏 油 之 出 於 石 者

其 三 泉 之 出 也 必 有 其 味 夫 泉 之 出 於 石 者 必 有 石 之 味 石 之 味 有 如 甘 者 有 如 苦 者 有 如 酸 者 有 如 澀 者 有 如 鹹 者 有 如 淡 者 有 如 臭 者 有 如 腥 者 有 如 臊 者 有 如 腐 者 有 如 敗 者 有 如 爛 者 有 如 臭 者 有 如 腥 者 有 如 臊 者 有 如 腐 者 有 如 敗 者 有 如 爛 者

其 四 泉 之 出 也 必 有 其 色 夫 泉 之 出 於 石 者 必 有 石 之 色 石 之 色 有 如 白 者 有 如 黑 者 有 如 黃 者 有 如 赤 者 有 如 青 者 有 如 藍 者 有 如 紫 者 有 如 綠 者 有 如 紅 者 有 如 黑 者 有 如 白 者 有 如 黃 者 有 如 赤 者 有 如 青 者 有 如 藍 者 有 如 紫 者 有 如 綠 者 有 如 紅 者

其 五 泉 之 出 也 必 有 其 聲 夫 泉 之 出 於 石 者 必 有 石 之 聲 石 之 聲 有 如 鐘 者 有 如 磬 者 有 如 琴 者 有 如 瑟 者 有 如 笙 者 有 如 簧 者 有 如 管 者 有 如 笛 者 有 如 簫 者 有 如 篳 篥 者 有 如 笙 者 有 如 簧 者 有 如 管 者 有 如 笛 者 有 如 簫 者 有 如 篳 篥 者

其 六 泉 之 出 也 必 有 其 氣 夫 泉 之 出 於 石 者 必 有 石 之 氣 石 之 氣 有 如 香 者 有 如 臭 者 有 如 腥 者 有 如 臊 者 有 如 腐 者 有 如 敗 者 有 如 爛 者 有 如 臭 者 有 如 腥 者 有 如 臊 者 有 如 腐 者 有 如 敗 者 有 如 爛 者

其 七 泉 之 出 也 必 有 其 德 夫 泉 之 出 於 石 者 必 有 石 之 德 石 之 德 有 如 仁 者 有 如 義 者 有 如 禮 者 有 如 智 者 有 如 信 者 有 如 忠 者 有 如 孝 者 有 如 悌 者 有 如 廉 者 有 如 恥 者 有 如 勇 者 有 如 剛 者 有 如 柔 者 有 如 強 者 有 如 弱 者 有 如 貴 者 有 如 賤 者 有 如 尊 者 有 如 卑 者 有 如 高 者 有 如 下 者 有 如 大 者 有 如 小 者 有 如 多 者 有 如 少 者 有 如 有 者 有 如 無 者 有 如 有 者 有 如 無 者

